

序章: 時を超えた瞬間

3月27日、パリで桜が咲き誇る中、私たちは故・横田進の不在を9年目に迎えました。1995年、サブライムレコードのオフィスで、レーベルの代表である山崎学(DJ Yama)を通じて初めて彼に会いました。当時、私は渋谷の宇田川町にある Mr. Bongo Tokyo で働き、フランスのレーベル F Communications の日本代表を務めていました。山崎さんから手渡されたのは、横田さんの PRISM プロジェクトのアルバム『Metronome Melody』のホワイトラベルプロモ盤でした。このアルバムはすぐに私のお気に入りとなり、DJ セットでもよく使いました。自然と、『Japan Vibrations Vol. 1』のコンピレーションにはそのアルバムから「Velvet Nymph」を収録しました。その後、横田さんとはすぐに親友になり、彼はハウスミュージックを探求し、DJ 活動も定期的に行うようになりました。そして1998年、彼が恵比寿のクラブ Lust で開催する「Skintone」パーティーのレジデント DJ に私を招待してくれました。

1993年、私はパリのテクノ専門レコード店 USA Import で初めて横田さんの音楽を聴きました。当時、ヨーロッパではテクノ、トランス、レイブ文化が盛り上がり、その中で横田さんのデビューアルバム『The Frankfurt-Tokyo Connection』が、ドイツの著名なテクノトランスレーベル Harthouse からリリースされました。同時期、もう一人の日本人テクノプロデューサー、ケン・イシイもベルギーの R&S Records からアルバム『Garden on the Palm』をリリースしていました。両アルバムは、日本からの新しいエレクトロニックミュージックプロデューサーが国際的に認知され始めたことを示していました。

日本におけるテクノの変革

1980年代後半から1990年代初頭にかけて起こった音楽の革新とともに、ハウス、テクノ、ヒップホップ、クラブジャズのシーンが出現し、東京のナイトライフは大きく変わりました。当時、東京には多くのレコード店がありましたが、世界中でリリースされる新しいクラブミュージックはまだ日本では新奇なものでした。しかし、WAVE のような店は、初期からアメリカやヨーロッパの新しいテクノサウンドをプロモートしていました。既存のエレクトロニック・テクノポップシーンも、この時期にクラブミュージックシーンと統合し始めました。例えば、細野晴臣はエレクトロとハウスに影響を受けたトラックを制作し、WAVE の常連客でもありました。

1991年から Space Lab Yellow で開催された DJ K.U.D.O. の「Zero」レジデンシーは、日本のテクノ

トランスのゴッドファーザーとして知られ、東京のアンダーグラウンドクラブシーンを代表するイベントの一つでした。「Zero」は、ローラン・ガルニエやスヴェン・ヴァースなどの国際的なテクノDJを東京に定期的に招致する最初のパーティーの一つでした。

また、電気グルーヴの石野卓球も、全国ラジオ番組「電気グルーヴのオールナイトニッポン」を通じてテクノシーンの成長に貢献しました。彼は番組内で新しい日本および国際的なテクノやダンスミュージックを紹介し、多くの人々がラジオを通じてテクノを知るきっかけとなりました。

1992年から1994年にかけて、東京のテクノシーンは急速に拡大し始め、Cave、Geoid、Maniac Loveなどのクラブや、Rave East、Connie's parties、The Twilight Zone、Da Da House、Key-Energyなどのイベントがシーンを盛り上げました。また、東京周辺の山々で開催されるアウトドアのゴアトランスパーティーも増えていきました。

1993年10月、Trigger Recordsが開催したイベントでは、ケン・イシイ、サワサキヨシヒロ、Organizationが出演し、国内のエレクトロニックミュージックシーンに新しいムーブメントが誕生しました。その後、Trigger RecordsはTransonic Recordsと改名し、新しいアーティストをリリースし始めました。大阪ではDJ Fumiya TanakaのTorema Recordsが最初のシングル「Green Tower」をリリースし、福岡ではKen InaokaがSyzygy Recordsを設立しました。

1993年11月には、Maniac Loveという日本初の本格的なテクノクラブがオープンし、山崎学がアーティストティックディレクターとしてSublimeパーティーを開始しました。これは1994年春のサブライムレコード設立へとつながり、Maniac Loveは東京のテクノシーンの重要な拠点となりました。この背景の中で、横田さんのアルバムがHarthouseからリリースされたことにより、彼の国内での認知度は急上昇し、日本でのパフォーマンスのオファーも増加しました。1993年12月には、デリック・メイが日本で初めてプレイしたパーティーや、Underground Resistanceの初来日ツアーの東京公演など、記念すべきイベントでパフォーマンスを行いました。

横田の始まり:世界をつなぐ

Toby Izuiは、音楽プロデューサーのMakotoを通じて横田さんと出会いました。ベルリンと東京を

拠点に活動していた Toby は、横田さんの音楽を広め、Sven Väth のレーベルや Dr. Motte の「Space Teddy」レーベルでのリリースを確保しました。1994 年 7 月、横田さん、Makoto、DJ Toby は、ベルリンの Tresor で開催された Love Parade に招待され、日本の新しいアーティストとしては初のヨーロッパでの重要なデビューを果たしました。

横田さんと Makoto の即興アシッドテクノセットは、TB-303、R8、Juno 60 だけを使用しており、このフェスティバルで強烈な印象を残しました。彼らのパフォーマンスは観客を熱狂させ、ドイツのアーティスト、Mijk Van Dijk は地元のラジオ番組で「こんなものは見たことがない。本当に狂っていた！」と語りました。横田さんは温かい歓迎を受け、彼のグローバルな音楽の旅の始まりとなりました。

もし日本に「セカンド・サマー・オブ・ラブ」が存在したなら、横田進はその主要な人物の一人だったでしょう。彼の 1994 年のアルバム『Acid Mt. Fuji』は、レイブ文化の確立と 1992 年から 1994 年にかけて急速に発展した日本の新しいシーンの誕生を強力に証明する作品です。

特に、1996 年に富士山麓で開催された日本初のテクノフェスティバル「Rainbow 2000」には、10,000 人以上の音楽愛好者が参加しました。

ケン・イシイと横田進は、日本から国際的なテクノシーンやレイブ文化に進出した最も著名なアーティストの二人となりました。日本のテクノコミュニティは、彼らの海外での成功を誇りに思い、両アーティストは新しい日本人プロデューサーや DJ の波をインスパイアし、日本のテクノムーブメントの成長に大きく貢献しました。そして 1995 年には第二の大きなブームを迎えることとなります。

エレクトロニックミュージックは、日本と世界をこれまで以上に近づけました。国際的なエレクトロニックダンスミュージックのアーティストや DJ が毎週末、日本をツアーするようになりました。シーンは渋谷を中心に急速に広がり、新しいクラブミュージック専門のレコード店 (DMR、Cisco、Technique、Mr. Bongo、Barong など) のオープンや、ダンスミュージックに特化したメディア (Remix、ele-king、Loud、Groove など) の創刊、パーティー、クラブ、ライブハウス (新宿の Liquid Room など) が成長するテクノムーブメントに対応していました。Sony Music Japan などの国内の大手レコード会社は、Sony Techno という自社のサブレーベルを立ち上げ、Transmat、Warp、R&S などの大手独立レーベルからリリースされた外国および国内のエレクトロニックミュージックをライ

センスし、プロモートしました。これは以前には見られなかったことです。東京のクラブシーンのエネルギーは高揚感に満ち、他に類を見ないものであり、東京をテクノ、ハウス、ダンスミュージックのグローバルな中心地にしました。

Acid Mt. Fuji: 壮大な傑作

1994年6月29日にサブライムレコードからCDでリリースされた横田の『Acid Mt. Fuji』は、神秘的なアシッドテクノジャムの強力なミックスで、リスナーを異次元の音の旅へと誘います。アシッド、アンビエント、ハードテクノのビートを融合させることで、横田は文化的な深みと感情的な強度を巧みに実現しています。

このアルバムは、横田の最も評価の高い作品の一つであり、北斎の「赤富士(または「赤富士」)」にインスパイアされています。北斎の超有名な「富嶽三十六景」シリーズの一部である「赤富士」は、夜明けに赤く輝く富士山を描いており、精神性と創造性を象徴しています。

このアルバムは、北斎の視覚的な世界から横田の音の「浮遊する世界」へと移ります。サイケデリックな巡礼として、このアルバムはエコー効果と絶えず変化するダイナミックな音を層に重ね、森の録音や電子パーカッションと共に進行します。日本の民話、自然、神社への言及があり、「キノコ」や「明治神宮」などのトラックはリスナーをアルバムのより深い旅へと誘います。このサウンドトラックは、ダンストラックのコレクションというよりも、一続きの音景として楽しむべきものです。

日本のニューエイジとミニマルテクノを融合させた『Acid Mt. Fuji』は、横田と日本に固有の自由でオーガニック、革新的でエネルギッシュな録音です。当初はアンビエントアルバムとして計画されていましたが、『Acid Mt. Fuji』は Roland TB-303 をフィーチャーした革新的なコンセプトアルバムに進化しました。当時の Harthouse のシグネチャーサウンドを彷彿とさせるこのアルバムは、横田にとって新しい方向性を示しましたが、このアルバムのマスタリングプロセスは、この新しい音楽ジャンルに不慣れなエンジニアのために当初は困難を伴いました。TB-303 とサンプラーを使用して自宅でライブ録音された横田の実験的なアプローチは、当時の彼の革新的なプロダクションスタイルを示しています。このアルバムのアートワーク(このアルバムの表紙に描かれた彼の絵)は、和の概念(日本と調和)にインスパイアされており、アーティスト、デザイナー、ミュージシャンとしての彼の多様なスキルを強調しています。

この特別なリリースは、Musicmine と Sublime Records の 30 周年を記念して、ベルリンの Manmade Mastering(2020 年に Transmigration でリリースされた Ebi の Space Teddy Collection アルバムのマスタリングを担当した同じスタジオ)によってリマスターされたトリプルビニールとして再発されました。この 3 枚組のデラックスエディションには、オリジナルアルバムの 11 曲に加え、初めて日本国外でバイナル化でリリースされる 5 つの未発表トラック(生の、ストリップダウンされたジャッキングなトラック)が含まれています(以前は 2016 年のデラックスエディション CD にのみ収録されていた)。また、この特別な機会にデジタルのみでリリースされるボーナストラックが 2 曲あります。1 曲は「Live at Shibuya Beam Hall」と題された横田のライブパフォーマンスで、1994 年 9 月に開催された Sublime Records のレーベルローンチパーティーで録音されたもので、以前は同じ 2016 年の CD 再発エディションにのみ収録されていました。このイベント「Sublime Records Presents New Style of Electronic Ambient Party」には、横田進、ケン・イシイ、サワサキヨシヒロ、Speedy J、DJ Wada などが出演しました。この 10 分間のレアなライブ録音は、主に 2 つの TB-303 とドラムマシンを使用して、横田がダイナミックな高速テンポのアシッドハウスジャムをライブセットで演奏する様子を捉えています。もう 1 曲のデジタルのみのボーナストラックは、最近発掘された DAT テープに収録されていたトラック「H」の別バージョンで、未発表の 5 曲も含まれており、この LP のマスタリングエンジニアによってサード LP に収録されています。

祝福

横田は常に新鮮でユニークなものを創り出そうとする情熱を持っていました。彼はさまざまな形式のアート絶えず実験し、コラージュアーティストのように音楽制作を通じて創造性の境界を探求しました。彼の作品について時折誤解があるにもかかわらず、横田は強力な創造的精神を持ち、前進し続け、さまざまな媒体で実験を行いました。彼はまた、時代の流れに敏感でありながら、迎合せずにそれを音楽を通じて消化し再解釈しようとしてきました。その結果、彼は亡くなるまでの 20 年間にシングルを含む驚異的な 70 のアルバムをリリースしました。

日本のテクノおよびハウスシーンの初期において、横田はヨーロッパとつながり、独自のアーティストとして確立する先駆者でした。彼は 90 年代初頭の西洋の音と日本の感性を融合させました。Japan Vibrations のために山崎学とインタビューした際、彼は横田を、アメリカ、ベルリン、ロンドン、パリなどの多様な文化を取り入れた音楽家として表現しました。これは彼の遺産にふさわしい賛辞です。

横田は孤独な存在であり、音楽を通じて自分の人生を表現するアーティストでした。深遠で神秘的、癒し、サイケデリックでユニークな日本の音楽を求める人々にとって、このアルバムは今日も活動を続ける日本の有力なエレクトロニックミュージックレーベル、サブライムレコード/ミュージックマインからリリースされた富士山のように象徴的な存在です。それはリスナーを心と想像力の内なる領域へと誘います。

目を閉じ、横田があなたを忘れられない富士山への旅に導くのにまかせて、その旅を楽しんでください。

アレックス・フロム・トーキョー・プラット

(Japan Vibrations、ワールドフェイマス、パリ)